

茨城県議会「県民との青空対話議会」（令和3年10月30日）の開催要旨

コロナ禍で日常生活が大きく変容する中、学生や生徒の皆様の声や意見を直接聴き、県議会での審議等に生かすため、茨城大学水戸キャンパスを会場に、青空のもと、茨大生3名・県内高校生3名と県議会の正副議長、正副常任委員長が一堂に会し「県民との青空対話議会」を開催しました。

学生・生徒の皆様からは、コロナ禍での学びの現状や抱える問題、地球温暖化等の様々な社会課題がある中、将来何に取り組みたいのか、また、県議会や県庁への関心や期待について、ご意見をいただき、併せて、茨大生の皆様から「茨城の魅力を探究し発信する高校生コンテスト」の活動状況の報告があり、6常任委員長がそれぞれコメントしました。その要旨を掲載しました。

1 「茨城の魅力を探究し発信するコンテスト（通称「いばたん」）」活動状況報告

「いばたん」は茨城大学人文社会科学部の学生運営委員会が主催し、県議会や県教育委員会後援のもと、企画運営している動画やアイデア企画作品のコンテストであり、「探求」、「学生主体の運営」を2本柱として、「若者の郷土愛の醸成」や「高校生の課題解決能力の習得」を目的に、今年で3年目を迎える。

「いばたん」の最大の特徴は、産官学連携にあり、県教育委員会、自治体、高校や企業といった多くの方々を支えられており、大学進学を考える高校生への支援や建設業のためのインフラツーリズム活動（人手不足に悩む建設業のためのPR動画作成）といった社会貢献活動も行っている。

これまで県内の多くの高校生が参加しているが、3年目を迎える今年度は、「いばたん」に参加する意義とは何か、そして茨城の価値、私の価値とは何なのかを考えるきっかけにするため、審査基準に「探究性」と「茨城愛」の2つの項目を追加し、「IBARAKI VALUE—世界に感動を、あなたに夢を—」というテーマを設定し、「いばたん」が広がることは、茨城の愛が広がることだと考えて活動している。

委員長コメント

⇒【加藤土木企業立地推進委員長】「いばたん」が世界に茨城を発信し、また高校生に夢を持ってもらうことを大きな目標としている点は本当にありがたい。皆さんが持つ郷土愛に加えて、水戸をはじめとした茨城の歴史を負の歴史や前向きな歴史検証も含めてPRの材料として、茨城県のすばらしさを伝えていただくことが、魅力度の向上に繋がっていくので、引き続き皆さんのアイデアをいただきたい。

⇒【岡田保健福祉医療委員長】自分が学生の頃に比べると、住んでいる場所やインフラにとらわれずに多くの情報の入手・発信が可能となっており、それにより発想も非常にグローバルになっている。

現在、県内の中学校の学校現場で行われている郷土検定は大変良い事業だが、残念なことに、高校、大学、その後事業化して夢を描くところまでつながっていないのが課題。

我々議会の人間も夢を持っており、夢を語れる人をたくさん育てたい。夢に向かって、茨城の魅力をどんどん発信していけるように、皆さんの力をお借りしたい。

2 高校生の皆様のご意見



田代 樹 さん

茨城県立東海高等学校 2年

コロナ禍での休校期間では、オンラインで授業を受けられたり、ネットなどで友人と繋がってはいたが、実際に会えない寂しさがあり、対面、オンラインどちらにも利点・欠点があると感じた。

この1年で2回の長期休校を経験したが、人と人との繋がりを大切にしたいと思うようになった。

学校が通常に戻った今は、生徒会の一員として、12月の文化祭が楽しめるものになるよう準備を進めている。高校卒業後は大学進学を希望しているが、留学やボランティア活動などで様々な人と触れ合い、様々な人の考え方、価値観に触れてみたいと考えている。



小田部 荘太郎 さん

茨城県立下館第一高等学校 2年

コロナの影響で休校期間が長引いたことで、学校の授業や学校生活の楽しさを改めて実感することができた。所属する硬式野球部では、全体練習はできなかったものの、自主練習により課題克服に取り組み、成長することができた。

実家は笠間市で自営業しているが、コロナの影響で売上げが減少する中、インターネットの活用により売上げを回復できたことで、今後の可能性を大きく感じた。

今後、グローバル化が進む中で、外国語のスキルなどを身につけて、グローバルな視点から、茨城県の魅力を広く発信できるような人になりたい。



飯村 旺我 さん

水城高等学校 2年

生徒1人1台タブレットを所有しており、コロナ禍で休校中でも遠隔授業が行われることで、常に学校で生活している雰囲気でも学習に取り組むことができた。

農業では、世界へ向けて生産プロセスを発信することが重要である。茨城県には世界に誇る農業があり、外国産に対して質の高さで勝負してきたが、これからは、生産者からダイレクトに消費者へメッセージを届けることにより、価格以外での競争を活性化させる必要がある。個人売買アプリ・メルカリを活用し生産者が出品・販売をすることで、消費者との直接的な交流が可能となり、長期リピーターを獲

得することも可能。商品の魅力をいかに発信し、消費者の心を動かすことができるか、それがとても大切。また、グローバルな時代であり、外国人をターゲットにした経営戦略も重要である。

将来は、農業の世界で上手な情報発信を行い、実際に消費者との繋がりを実践して、茨城県の農業の振興に貢献したい。

委員長コメント

⇒【鈴木営業戦略農林水産委員長】 コロナ禍でICTの技術、応用活用が大きく進んだ。

皆さんが置かれている環境の中を強く生き抜く力を主体的に考えながら、生徒会活動、部活動など今後の高校生活をしっかり送ってほしい。

農業については、付加価値をつけるためには、数値の高いものを生産することに加え、生育された環境風土など商品にまつわるストーリー性により価値を出していくことが重要であり、新たな視点での思考や技術の応用力が必要となってくるが、高校生の皆さんが既実践され、それを論理的に表現出来ていることに本当に驚いた。これからも、一緒にこの茨城や日本を盛り上げていければと思う。

⇒【星田防災環境産業委員長】 コロナ禍での休校は、前向きにとらえれば大切なものを改めて感じる、一歩立ちどまって考える時間となったのでは。一方、オンライン授業は可能性を感じつつも対面の方が効果的な面もあると聞いている。文化祭、部活動など残りの学校生活を素敵に過ごしてほしい。

農業の発信については、消費者は商品のストーリー性や背景を重視しつつある。ネット販売の普及により、大きくルールが変わる時であり、そういうところにチャンスがあるため、その素晴らしいアイデアを生かしてほしい。

グローバル化については、今は国際人が求められる時代であり、語学力だけでなく、自国の歴史や文化、特産物等をしっかり理解してこそ、真の国際人として活躍できるため、そうしたところをさらに深めてほしい。

3 大学生の皆様のご意見



片山 彩香 さん

茨城大学人文社会科学部 4年

コロナ禍での学習については、オンライン授業等に大きな困難がなくスムーズに移行できたが、今の大学1年生は、授業以外の活動が制約され苦労しているので、大学はサポートを万全にしてほしい。

将来取り組みたい社会課題は、これからも地方創生に取り組んでいきたい。これまでの「いばたん」の活動で、動画の持っている可能性を強く感じており、就職内定を得た映像配信関係の会社で仕事をし、ゆくゆくは地方創生に還元していきたい。テレワークと映像を組み合わせ活用することは、距離

による地域格差が生まれる地方でこそ活用価値がある。

県議会については、議員との意見交換会等を通じて教科書の世界ではない政治を見ることができてよかったが、問題意識の背景が身近な方の経験がベースという印象を受けたので、大学で社会調査を学んだ私としては、質的な調査だけではなく、量的な視点を踏まえた問題意識だとより共感できると感じた。



黒沢 真緒 さん

茨城大学人文社会科学部 3年

大学生として、授業はもちろん、ゼミなどの課外活動や外部の人と繋がることで得られる学びは社会に出てからも役立つ経験であり、コロナ禍でその機会が奪われたことはとても辛かった。

「いばたん」の活動を通して、県の広報に関心を持つようになった。県民の愛着度が低いのは茨城のことを知らないからと考えており、将来は、県民へ茨城の魅力を発信していく仕事がしたい。

県議会には、開かれた議会を推進してほしい。高校生たちにも、「いばたん」を通して、自分の地元や県内のことを知ってもらい、ぜひ議員の話聞き、意見交換をする機会を設けていただきたい。



吉田 千尋 さん

茨城大学人文社会科学部 3年

コロナ禍で、大学生ならではの自由を経験する機会を奪われてしまったと強く感じている。

私たちは、「いばたん」やゼミ活動で社会の可能性や選択肢を広げられているが、活動が制約されている今の大学1年生には、社会に出るまでに大学の楽しさを経験してほしい。

就きたい職業等はまだ決まっていないが、目標達成に向けて、様々な課題が生じる中で、ピンチがあってもそれを前向きに捉えて、むしろみんなで楽しく乗り越えていこうとする県議会議員の方々の姿を見て、地道に自分のできることを粛々と、かつ汗水垂らして泥臭くやるような人間になりたい。

県に対しては、職業選択をする大学生に、より等身大の県の情報を提供してほしい。「いばたん」を通して、県の仕事に関わる機会を得たが、表面的な情報のみならず、実際に現場で働いている職員が県の仕事に対してどう考えているかなど、若者が求める情報を提供してほしい。

委員長コメント

⇒ **【田口文教警察委員長】** 人間は言語をいかに使いこなすかによって進化してきた。皆さんが自分の考えを言語化できていることに非常に感心した。現在、ネットが普及しているが、言語化された言

葉を読みこなす力が低下しており問題となっている。また、過去を悔やんで未来を心配すると人は病気になるので、「今を生きる」ことが大事である。

皆さんが今後、日本、そして茨城を変えていくことになるので、ぜひ目の前の現象について、「私はこう思う」ということを力強く発信できる人になってほしい。

⇒【戸井田総務企画委員長】常陸國總社宮例大祭（石岡のおまつり）は、世界で一番だという誇りを持っており、石岡の子どもたちも郷土に誇りを持っている。皆さんたちの郷土愛の取り組みは素晴らしいことである。

学生の皆さんは、コロナ禍でオンライン授業や活動が制約され大変だとのことだが、大学、高校時代はコロナ禍で大変な思いをしたということ、そしていかに克服をしたかということ、皆さん、自分の心の中に刻んでいてほしい。

県議会も様々な取り組みを情報発信しているが、どのようなPRをすれば、若い方々に見ていただき、興味を持っていただけるかということをお互いに教えていただき、お互いいろいろな提案をしながら、さらに良い方向に進んでいければと思う。

4 若者の投票率の低い現状について

【茨城大学4年 片山彩香さん】

若者世代は、ライフステージの前半にいるため、政治と行政との接点を見つけにくいことが投票率の低さの一原因と言われている。

デジタルキッズ代表の私たちは、生まれたときから情報化社会の中で生きており、自分の投票行動の軸が決まる前から、情報がありすぎるというのが、逆に、投票の棄権の原因である面倒臭さに繋がっているのではないかと。自分の1票では何も変えられないという同世代の気持ちも理解できるが、若年層向けの政策が実行されるには、若年層が投票を通して熱意を見せないといけない。県議会や行政にも、そういうメッセージを出せば響くのではないかと。

【茨城大学3年 吉田千尋さん】

コロナ禍により若者が政治に対して興味関心が芽生えたことで、明日の衆院選は投票率が上がるのではないかと。若者の政治に関する興味関心は、三者三様。政治については、小中高校の授業で学ぶ機会が多くあったが、受験に向けての暗記科目として取り組んでおり、非常に苦手意識を感じている。

本日は、議員の方々と間近にお会いして、政治の面白さを学んでいるが、その面白さを教科書から学び知ることは難しい。議員の皆様には、本日の青空対話議会、県議会の傍聴、大学での授業などを通じて、政治が大学生に身近なものだということをお教えしてほしい。

【下館一高2年 小田部荘太郎さん】

本校で選挙に関するアンケートを実施したところ、選挙権のある94人のうち、約70%が選挙に行っており、家庭内や学校からの促しが大事であることが分かった。

県議会には堅苦しいイメージがあるので、青空対話議会のような会を、多くの学校や市町村で開いていくことで、県議会との距離が近くなり、若者が票を入れやすくなることに繋がるのではないかと。

若者の投票率に関する常井議長コメント

- 3年前の県議会議員選挙の投票率は県平均41.86%で民主主義の危機。民主主義は非常に弱いので皆で育てていかなければならない。
- 18歳の投票率は、主権者教育で上がるが、大学生になると下がってしまう。
- 自分の1票では何も変えられないという意見には、我々政治家も若者ターゲット政策を取り入れる努力をしなければならないし、若者の皆さんは、投票に行くことを友達などに呼びかけてほしい。
- 社会は自分の未来も含め政治によって動く仕組みになっている。我々政治家も、常日頃から若者にこの政治の面白さや身近さを実感してもらえるような努力が必要である。
- 同じ社会を作っていくための基本なので、皆さんには投票率アップに協力していただきたい。

4 常井議長の総括コメント

- 県民の皆さんの前にどんどん進んでいく、こちらから歩み寄っていく県議会にしていきたい。
- オンライン授業、自主学习、部活ができない、学校行事が削られたなど、つらい日々を送られたようだが、インターネットの普及で孤立はしなかった点が救い。一方で、人と人の繋がりが大切だと感じられたようで、これからそういう面にも自分から積極的に歩んでほしい。
- 皆様一人一人から、将来取組みたいことについて意見をいただいたが、それぞれ頑張ってもらいたい。
- 今日は大変有意義な時間を過ごせたが、県議会は今後も県民の皆様と対話を続けていく。今後とも、県議会に関心を持ち続けほしい。皆様方の今後のご活躍を心から期待する。

<青空対話議会の様子>

